

クセノボン：

「その後テーバイ人は、彼ら自身が自分達を除いて他の誰もラケダイモン人に対して戦争をしないのではないかと恐れ、以下に述べるような謀略を工夫したのであった。彼らはテスピアイのハルモステス（統監）スポドリ阿斯を、推測されているように、アテナイ人をラケダイモン人に対する戦争に巻き込もうとして、財物を贈り、アッティカに侵攻するように説得したのであった。それで彼は彼らの説得を受け入れ、ペイライエウスを占領しようと主張して、夜明け前にペイライエウスに到達すると言明して、朝早い朝食を摂ってテスピアイから兵士らを率いた。」（Xen. *Hell.* 5. 4. 20）

「トリアにおいて朝となり、その時、人目を避けようとはせず、反対に、家畜を略奪し家屋を荒らしたのであった。ちょうどその場に居合わせた何人かの人が夜陰にまぎれて町に逃げ込みアテナイ人に非常に多くの軍勢が近づいてきていると報せたのであった。そこで人々は急いで武装を整え騎兵と重装歩兵がポリスの警備に就いたのであった。」

（Xen. *Hell.* 5. 4. 21）

「他方ラケダイモン人の使節らが、エテュモクレスとアリストロコスそれにオキュロスがプロクセノスのカッリアスの所に滞在中でアテナイに居たのである。彼らをアテナイ人は、事件が報告されると、これらの人々が共同で謀議を企てたという理由で、捉えて監禁した。彼らは事件に驚愕し、もしペイライエウス占領を知っていたのなら、町中で、ましておや自分達をもっとも速やかに見つけ出されるようなプロクセノスの所で自分達が捉えられるのを許すほど愚かではないと弁護したのであった。」（Xen. *Hell.* 5. 4. 22）

「更にラケダイモン人のポリスはそのようなことについて知らなかったということがアテナイ人に非常に明白になろうと語ったのである。というのはスポドリ阿斯については国家によって処刑されるのを聞き知るだろうということを自分達は良く知っていると言断したのであった。それで彼らは知らなかったという判決を受けて釈放されたのであった。」

（Xen. *Hell.* 5. 4. 23）

「他方エポロス団はスポドリ阿斯を召喚し死罪で告発したのである。しかし彼は恐れて従わなかった。同様にたとえ従ったとしても判決において放免されたであろう。それで多くの人々には確かにその裁判での判決がラケダイモンにおける最も不正な事柄だと思われた。以下述べることがその原因であった。」（Xen. *Hell.* 5. 4. 24）

「スポドリ阿斯にはちょうど少年を脱したばかりの年齢のクレオニューモスという息子がおり、同年齢の若者達の間で最も美しく最も評判が良かった。アゲーシラーオスの息子のアルキダーモスがたまたまこの若者に恋していたのである。さてクレオンプロトスの友人達は、同時に彼らはスポドリ阿斯の仲間であったが、彼の無罪放免を勝ち取ろうとしていたが、アゲーシラーオスとその友人達と同時に中間派の人々を恐れていた。というのは恐るべき数々のことを行なってきたように思われたからである。」（Xen. *Hell.* 5. 4. 25）

「それから以降今度は逆にテーバイの人々が元気を取り戻し、テスピアイやその他の周辺諸都市に軍を進めた。それにも関わらず民主派はそれらの諸都市からテーバイへと退いたのである。というのはかつてのテーバイにおいてそうであったように、それらの諸都市においては門閥政治の状態にあったからである。その結果それら諸都市のラケダイモン人の友人達は援軍を求めている。ポイピダスの死後ラケダイモン人はボレマルコスと一個モラーを海路派遣してテスピアイの警備に就かせたのである。」（Xen. *Hell.* 5. 4. 46）

「アゲーシラーオスがテスピアイに到着した時、市民らが内乱状態に陥っているのを目撃し、親ラケダイモン派と称する人々が敵対派の人々、その中にはメノーンがいたが、を殺戮しようとしていたのを、彼はこのようなことを黙認しなかった。彼は彼らを和解させ互いに誓約を交わさせ、かくしてキタイロンを越えてメガラへと撤退したのである。そしてその地で同盟軍を解散し市民軍を率いて故国へと戻っていった。」(Xen. Hell. 5. 4. 55)

プルタルコス：

「さてラコニアの人でアゲーシラーオスとは敵対党派に所属しテスピアイにハルモステスとして任命されていたスポドリラスなる人物がいた。引っ込み思案でなければ巧妙心を持たない人物ではなく、常に分別思慮よりも大いなる野心に満ちていた。この男が大いなる名声を熱望しテーバイでの非常に無謀な行いからポイピダスが有名になり尊重され話題にしばしば上るようになったと思ひ、陸路気付かれぬで攻め寄せて、もし自力でペイライエウスを占領しアテナイ人から奪ってしまえば、ずっと申し分ないだろうと信じていた。」(Plut. Ages. 24. 3)

「ペロピダスとメローンの党派に属するポイオータルケースの職にある人々によって次のような陰謀が行なわれたと言われている。というのはラケダイモン最良のふりをした人々をひそかに送り込み、これらの人々がスポドリラスに彼だけがそれほど大きな仕事に相応しいと述べて持ち上げ、それと同じように不正で無法であるが、豪胆さと幸運を必要とする行動をけしかけ煽ったのである。」(Plut. Ages. 24. 4)

「彼は夜陰にまぎれてペイライエウスに到達しようという期待していたが、トリア平野で夜明けとなり明るくなってしまった。それにエレウシスの方にある神殿からの灯りを目にして兵士らが恐れおのき恐慌状態に陥ってしまったと言われている。もはや人の目を逃れることは出来なくなってしまったので、彼は豪胆さを失い、取るに足らない獲物を投げ散らかしながら、不名誉にも面目を失ってテスピアイへと退却した。」(Plut. Ages. 24. 5)

「それで弾劾状を携えた使節がアテナイからスパルタへ送られが、役人達はスポドリラスに対する告発を必要とはしておらず、彼に対して死罪を求める裁判が公布されており、アテナイ人に対して恥じ、一緒になって悪事を働いたと思われるように、共に悪事を被ったと思われるように望んでいる市民たちの怒りを恐れて、彼は受け入れるのを拒否したのである。」(Plut. Ages. 24. 6)

ディオドロス：

「その後指揮官に任命されていたスパルタ人のスポドリダスを、ラケダイモン人の王クレオンプロトスがエボロス団の意向抜きにペイライエウスを占領するように説得したのであった。」(DS. 15. 29. 5)

「それでスポドリダスは1万名以上の兵士を擁して夜陰にまぎれてペイライエウスを占領しようとしたのである。しかしアテナイ人に発見され計画を全く達成することなく為す術もないまま戻っていった。スパルタ人の会議において告発されたが、王達の加勢を得て、無罪放免されたのである。」(DS. 15. 29. 6)